

底魚資源調査（夏季）を実施しました

水産試験場では、本県沖の主要な底魚資源の動向を把握するため、平成15年から調査船いばらき丸（179t）により年2回（夏季、冬季）の着底トロール調査（オッタートロール）を実施しています。本調査では、本県沖の水深75～450mまでの海域、合計29定点において、15～30分間（速力3～4ノット）網を曳き、面積密度法により現存量を推定しています。今回は令和3年7、8月に実施した夏季調査結果についてお知らせします。

1 主要な底魚類の推定現存量の推移

平成21年から今年までの現存量の推定結果を下表に示しました。また、参考として、県で資源評価を行っている魚種については資源水準も記しました。直近5年間の推移から増減傾向を判定した結果、増加傾向にあるのはムシガレイ1種、横ばい傾向にあるのはエゾイソアイナメ（どんこ）1種、減少傾向にあるのはヤナギムシガレイ、ババガレイ（なめた）、アカガレイなど14種でした。ただし、直近3年間で見ると、アオメエソ（めひかり）の現存量が2年連続で増加しており、今後の動向が注目されます。その他、漁獲対象とはなっていないトラザメ（ねこざめ）は減少傾向、テナガダラ（とうじん）は横ばい傾向でした。前年調査と比べると、増加傾向の魚種は0種から1種に増加し、減少傾向の魚種は14種のまま変わりませんでした。

表 推定現存量の推移（夏季トロール調査）

		(単位:トン)												傾向	水準※	
魚種/年度		H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2			R3
対象種	ヤナギムシガレイ	34	36	31	27	45	48	52	127	71	64	45	27	23	減少	中位
	ババガレイ(なめた)	42	48	38	91	77	71	53	96	79	70	49	25	17	減少	—
	アカガレイ	8	23	22	65	4	5	5	109	29	10	1	2	1	減少	—
	マコガレイ(本まこ)	19	18	30	28	5	5	16	29	26	19	50	14	18	減少	低位
	マガレイ(沖まこ)	12	23	44	37	7	11	23	20	16	15	5	1	0	減少	中位
	ムシガレイ	19	6	22	20	15	17	31	135	155	92	152	115	228	増加	高位
	ミギガレイ(にくもち)	65	50	77	83	197	107	65	162	111	105	85	36	46	減少	—
	ヤナギダコ(みずだこ)	102	339	245	267	313	213	250	199	217	270	111	68	77	減少	低位
	アオメエソ(めひかり)	48	8	23	27	409	69	48	312	193	260	57	110	160	減少	高位
	エゾイソアイナメ(どんこ)					163	173	156	387	242	151	157	130	218	横ばい	—
	マダラ	79	34	7	724	166	179	144	142	16	56	3	4	0	減少	—
	アカムツ					2	25	21	22	23	14	24	15	14	減少	—
	ユメカサゴ(のどぐろ)					22	29	26	32	111	189	78	30	37	減少	高位
	キチジ(あかじ)	61	58	17	50	21	10	15	31	64	52	13	23	9	減少	—
ズワイガニ(本ずわい)	103	141	149	59	40	73	58	108	111	9	3	0	3	減少	—	
ベニズワイガニ(紅ずわい)	66	118	88	82	1	1	1	1	12	0	0.2	6	0	減少	—	
参考	トラザメ(ねこざめ)	3,785	3,053	1,426	604	1,616	777	1,119	960	1,603	1,231	1,629	1,027	1,077	減少	—
	テナガダラ(とうじん)					977	1,389	6,559	1,126	907	1,113	2,116	340	1,210	横ばい	—

※水準:「茨城県産重要魚種の生態と資源」(令和3年3月更新、水試ホームページ)で報告している資源水準。—は未評価。
※エゾイソアイナメ、アカムツ、ユメカサゴ、テナガダラは、H25調査から現存量計算。

2 アオメエソ資源の状況

今回の調査では、主に各地先の150～250mの水深帯で全長8～1cmのアオメエソが採捕されました。採捕個体の全長組成を深度別にみると、水深150mでは約8割が11cm以下の小型魚、水深250mでは約8割が13cm以上の大型魚、水深200mでは9～17cmで構成されていました(図1)。また、現存量をみると令和3年は全長9～16cmまでの各階級で増加し、全体では昨年からおよそ1.4倍に増加していると推定されました(図2)。今後の漁獲主体になることが期待される小型のアオメエソ(12cm以下)の割合が高い水深150m付近での操業を控えて、250m以深で操業を行うことが資源の有効利用につながると考えられます。(水産試験場 定着性資源部)

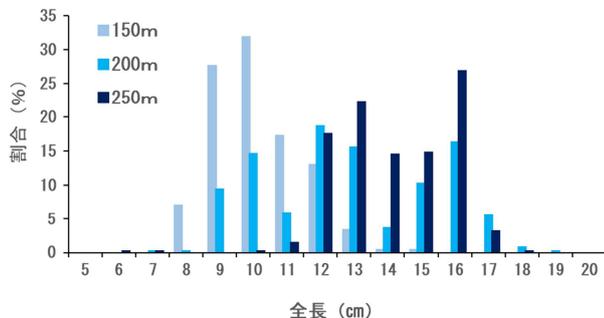


図1. アオメエソの深度別全長組成 (R3)

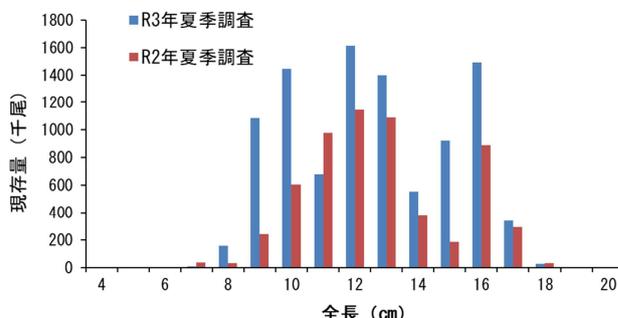


図2. アオメエソの全長別現存量 (R3, R2)

訂正のお知らせ

前回の水産の窓(鹿島灘はまぐりの資源状況)で「R2年の資源個体数4,302万個、資源重量4,535トン」と記載しましたが、正しくは「R2年の資源個体数4,308万個、資源重量4,577トン」でした。お詫びして訂正いたします。

【次回予告】令和3年10月15日発行の水産の窓は「海洋観測結果」を予定しています。